

関西大学大学院外国語教育学会 NEWS VOL.4

The Society of Kansai University Graduate School of Foreign Language Education and Research

発行日:2010/5

発行者:外教学会広報通信委員会

この号の内容

- 1 はじめに
(中島巖先生)
- 2 大会報告
- 3 実践報告
- 4 研究報告
- 5 研究交流
特別企画発表
- 6 基調講演
- 7 あとがき
- 8 編集後記

“進化”する当外国語教育学会を言祝ぐ

関西大学名誉教授 中島 巖

桜花爛漫の新学年度初頭にあつて私は現在の外国語学部の前身である外国語教育研究機構 2005 年の春に退職して、はや5年が経ちました。以来、この外国語教育学会には例年出席させていたたき、発表を興味深く拝聴してまいりました。毎回多彩な報告に接しましたが、総じて今年の内容には、これまでの皆さんの精進が“進化”の跡を残して浮き立っているような印象がありました。

私の目には、午前部の部にあつた現場の教壇からの実践報告2題が、別けても新鮮な活力と創意工夫に彩られていて、昨今、外国語教育の望ましい教授・学習過程の展開例であると映りました。学ぶ者の内発的な興味・関心をいかに育て、実際の学習場面へ湧出させるかは、ひとり外国語のみならず、あらゆる教科教育の要諦であるからです。

かく云う私自身、今より半世紀も前に、遅く院生の頃からドイツ語を“独習”した一人であります。心理学の畑から縁あつてお誘いを受け、機構に移籍してドイツ語のコミュニケーション・クラスをネイティブの講師とタンデムで担当する幸運に恵まれたことを、今は懐かしくも有難く回想いたします。そして、やはりその遠因は、私がドイツ語を無類に好きになったことに由来しています。

私の内(なか)では、“読み書き話し聴く”の4技能は、一つの“能”力のFacettenであります。どの彫面に向かっても心内では同じ意味直観にたどり着くという意味で母語と同じく、それらは一つのダイナミックなシステムを築いており、その成素になっていると思われまふ。今後、当学会のプログラムの一端に、こうした角度からのアプローチも掲げられるようになればと私は願っておりますが、それは、やはり心理畑からの習性を残した所望と云うべきものでありましようか。

大会報告

研究大会委員長 杉田麻哉

関西大学大学院外国語教育学会の第4回研究大会は、2010年3月28日(日)に「多文化共生社会における外国語教育」という大会テーマのもと、関西大学千里山キャンパスに於いて開催されました。約40名の参加者を得て盛会のうちに幕を閉じました。

基調講演では、トロント大学名誉教授の中島和子先生をお迎えして、「カナダの継承語・バイリンガル教育と日本の年少者言語教育」というテーマでお話をして頂き、カナダで行われているバイリンガル教育の視点から日本の言語教育について深く考える機会を持ちました。

また、2件の実践報告では、授業展開や指導内容・方法等に関して、活発な議論がなされました。初の試みである「研究交流特別企画」の発表を含む5件の研究発表では、様々な学習環境下での外国語教育や研究手法のあり方とは何かを考える機会にもなりました。大会終了後の懇親会でも、20名の方にご参加頂き、発表者や参加者の貴重な情報共有の機会となった事と思ひます。

5段階評価によるアンケートの結果、満足度や参考度は、大会全体を通しては4.72、基調講演は4.77、研究発表は4.9、研究交流特別企画は4.45と高評価をいただきました。

最後に、大会の準備にあたりご尽力下さった会長の八島智子教授、田尻利恵子幹事長をはじめとする学会役員の方々に衷心よりお礼申し上げます。

実践報告

I 「生徒の授業内英語発話促進の取り組み

-中学校教育現場における実践報告-

横山貴之（報徳学園中学校・高等学校）

横山さんは「中学生の実践的コミュニケーション能力育成のためには、授業内で中学生が自分で状況に合わせて英語を発話する機会を増やす必要がある」と考えました。そして、生徒が教師から課せられたタスクをする場面以外での英語発話を「授業内英語発話」と位置づけて、「授業内英語発話を促進することがコミュニケーションの基礎である『意欲・関心』にどのような影響を与えるか」を明らかにしようと考えました。

そこで横山さんは、授業内英語発話がほとんどなされていない実態を授業観察によって浮き彫りにした上で、中学1年生から中学3年生を対象に、教室内英語発話を促進する活動を実施しました。そして、既習文法事項がどのように使われているか分かったという「気づき」と英語を話すことができたという「達成感」を生徒に与えて生徒の学習意欲を高めることができたことを、質問紙による調査結果で示しました。

会場からは「ここまで成果を出せたことはすばらしい」とのコメントがありました。授業を展開する上で非常に示唆に富んだ報告でした。また、修了生の方がこのように活躍されていることを知り、在校生として大きく勇気づけられました。

(山岡浩一)

II 「大学入試での成果が求められる英語授業の可能性」

正頭英和（立命館中学校高等学校）

発表は「大学入試での成果が求められる英語授業の可能性」という内容で、発表者が勤務されている立命館中学校高等学校で2008年度より新設されたアドバンスドコースでの試みを実践報告というかたちで紹介されたものでした。

大学院生として関西大学大学院外国語教育学研究科で身につけられた知識を現場で大いに生かされているのが印象的でした。特に、発表者が大学院生時代に専門として学ばれたテストニングの知識を生かし、「定期テストの発想を変える」という試みは非常に納得がいく内容でした。日々の活動をテストで測るのではなく、テストが日々の活動を決定していくという発想、さらに、テストはインテイク活動であり、アウトプット活動はテスト以外で行うという発想など、今後教員を目指す方々さらには現職教員の方々にとっても非常に参考になるものでした。

さらに、「成績を伸ばすための工夫」「テスト作成における大切なポイント」「英語嫌いを作らない工夫」など具体的な案がそれぞれ提示されており、テスト作成以外にも英語教員に知見を与えてくれた発表でした。

(古屋あい子)

研究発表

I 「処遇群・対照群」×「Pre-test・Post-test」実験デザインにおける適切な分析方法とその注意点

石田侑吾（関西大学大学院外国語教育学研究科博士前期課程）

外国語教育学研究において、特定の指導方法の効果を処遇群（Treatment group）と対照群（Contrast group）の2群の差を測り、比較、そして処遇の効果を確認するという実験デザインがよく用いられている。本発表では、石田さんは先行研究をまとめ、我々の研究分野でよく用いられる、処遇群と対照群と用いた実験デザインを使用した際に、分析方法として、どのような手順、そして統計手法を使うのが望ましいか、加えて、それらの手法に付随する問題点について解説してくださいました。

本発表において、石田さんは、ある実験を仮定し、具体的に5つの実験デザインを提示し、どの実験デザインがふさわしいか、また否かを論理的な視点から説明し、そして実際にPC上でシミュレーションを行ってくださいました。発表では、実際に分析手法を可視化して解説して下さったため、統計が苦手な参加者にもわかりやすく大変好評でした。質疑応答時には、フロアから出る質問に対し、丁寧かつ的確に答えてくださり、石田さんの真摯な姿勢に感心するとともに、統計に関する参加者の関心の高さを実感しました。

（植木 美千子）

II 「JEFLL Corpus の BNC との比較：“I” と “think” を中心に」

表 昭浩（関西大学大学院外国語教育学研究科博士後期課程）

表さんの研究は、日本人中高生の自由英作文を収集した学習者コーパスである Japanese EFL Learner (JEFLL) Corpus と、英語母語話者コーパスの British National Corpus (BNC) のサブコーパスを用いて、“I” と “think” の量的特徴を比較することを目的に行われました。具体的には、英語母語話者と比較したときに、日本人中高生の主格の代名詞 “I” に過剰使用が見られるか、2) “I think” の語句連鎖にはどのような特徴があるか、の2点をリサーチクエスチョンに決めました。分析には、AntConc を利用し、また、統計値には、対数尤度比を用いました。その結果、日本人中高生は、作文において “I” を過剰使用していることが判明しました。また、“I think” の産出パターンは、英語母語話者の話し言葉のパターンに類似している部分もある一方、“I think I should ~” などの義務的表現や、“I think I want to ~” の欲求表現は、英語母語話者の産出パターンとは（ほとんど）一致しないという結果も得られました。

以上を踏まえて行われた質疑応答では、過剰使用は「不適切」にあたるのか、といった質問や、学習者の産出パターンは、実際に学校現場での指導の影響が大きいのではないか、といった指摘があり、議論を交わしました。本研究で得られた結果を確証するという意味でも、今後、表さんが行う追調査に大きな期待が寄せられます。

（石田 侑吾）





Ⅲ 「「留学生 30 万人計画」のもと留学生に対する日本語教育はどのような役割を果たすべきか—言語環境及び学習面に関する実態調査が示唆するもの—」

戎妙子（関西大学大学院外国語教育学研究科博士後期課程）

大学での日本語教育に携わる戎さんは、政府が 2020 年を目途に「留学生 30 万人計画」を進める一方で、現在 13 万人を超える留学生の「人材」としての日本語力が、大学／企業側のニーズから隔たるものであるのを問題視し、日本語教育に携わる者として何ができるのかを主題に取り上げられました。そこで高等教育機関での日本語教育（アカデミック・ジャパニーズ）の再考を研究目的の一つに掲げ、今回は私立大学在籍の L2 を日本語とする学生 35 名に対して行った、言語環境と学習面に関する実態調査を中心にお話されました。データはインタビュー・自由記述・授業内での成果物の分析によって収集され、得られた結果を言語環境面・要約面・聴解面・読解面ごとに分類されました。ここでは実際の学生の記述テキストを提示しながら、「テキストをまとめられない」や「日本語の正書法のエラー」という問題点を紹介されました。最後に考察として、上級者に対する音声教育のボトムアップ的指導や統語能力の育成への早急な対処が重要であると力説されました。留学生の職業教育を視野に入れた興味深い発表でした。

（藤川穰輔）

研究交流特別企画発表

I 「中国の少数民族における言語教育政策—三言語教育を受ける子供を対象としたアンケート調査から—」

ウリガ（大阪大学大学院言語文化研究科 博士課程前期課程）



中国では、人口の 92%を占める漢民族を除く残りの 55 の民族に対して行う教育を少数民族教育と呼んでいます。発表者のウリガさんは 2009 年 7 月に中国内モンゴル自治区の一つの小中一貫制の民族学校でモンゴル語、漢語、英語の三言語教育を受けている中学部 2 年生 62 名を対象とした（有効回答 50）アンケート調査の分析結果から、アイデンティティ意識、現在の教育への態度および学習意欲、言語能力自己評価などを中心に発表されました。中でも興味深かったのは、三言語の重要性や三言語の授業時間数を増やすことを希望するかについての結果から、英語に対する興味、関心が浮かびあがったと同時に、漢語で教科学習を必要があるという回答が半数を超えていたという報告でした。グローバル化が進む中での国際語としての外国語のあり方、あるいは多文化共生における外国語としてのあり方の双方を踏まえて教育を行っていくことが大切なのではないかということを考えさせられる興味深い発表だったと思います。発表後は、研究手法やデータの解釈についての質問が飛び交い、活発な意見交換や質疑応答が展開されました。少数民族教育について知る機会というのはなかなかありませんでしたが、今回、他大学院の院生の皆様のご発表を聞かせて頂くことで色々と学ぶことも多く、大変勉強になりました。

（田尻利恵子）



Ⅱ 「異文化での案内役としての「観光ガイド」を対象とした日本語教育
—教材分析とコース実施を通じた考察—

下村朱有美 (大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程)

近年、観光を目的として外国を訪れる観光客が増加する中で、下村朱有美さんは、現地の言語ではなく、観光客の話す言語で案内する観光ガイドについて報告されました。まず、既刊日本語教材の分析、問題点を指摘されました。目次等を参考にし、KJ法で分析された結果、行動に関する項目、観光地に関する情報を提供する項目に大別されました。多くの地域で共有している学習項目と各地域特有の学習項目を分類し、整理する必要があることを指摘されました。

次に、ブータンでの日本語教育について発表されました。ブータンでの唯一の日本語教育は、現地観光局内で実施されたもので、短期日本語コースが 2008 年度、2009 年度に行われています。参加者からのコメントを分析した結果、日本語表現の整理、学習項目の抽出・整理、学習やガイド経験者による授業、教材開発、実習の実施、音声教材開発、日本人との接触機会を増やすなどの項目があがりました。今後の展望として、地域に応用することができるようなシラバス作成（行動シラバス、説明シラバス）やコースデザインを提案されるとのことです。

最後に、下村さんのブータンに関する報告は大変興味深いものでしたので、帰宅後にブータンを Wiki 検索しました。すると、新たな発見がたくさんあり、楽しかったです。

(西田理恵子)

基調講演



I 「カナダの継承語・バイリンガル教育と日本の年少者言語教育」

トロント大学名誉教授 中島和子先生

バイリンガル教育で著名な中島和子教授から 90 分の基調講演をしていただいた。ご自身の息子さんの体験談を踏まえて、継承語と母語の違い、異文化適応能力と言語教育の重要性について話していただいた。

世界がグローバル化している中、国を越えて移動する 1 世や 2 世が増えてきている。1 世で 9 歳～10 歳以上で国を移動した場合、土台となる母語の言語や文化が確立しているため他の言語を学習してもその上に積み重なるので 2 言語の習得はそれほど難しくない。しかし、2 世や 9 歳～10 歳未満で国を移動した場合、土台となる母語が弱くもろいので、親の言語が継承語となり、現地語が母語となる要素が高くなる。特にマイノリティーの言語の場合、母語が継承語になってしまうと消滅してしまう恐れがある。

カナダのバイリンガル教育の制度や、日本で行われているバイリンガル教育のカリキュラムの違いなど、バイリンガル教育も国や目標言語によってカリキュラムが異なてくることが大変興味深かった。90 分の講演では全てを話し終わることができず、10 分ほど延長して講演を終わられた。ご自身の体験談等を含めたとても楽しいお話で

これから自分の子供にバイリンガル教育をしたいと考えている学生たちにとっては有意義な内容だった。質疑応答の時間が十分にとれず、フロアからは1名の質問しか受け付けることが出来なかった。八島先生から今後の日本の言語教育への示唆についての質問があり、中島氏は小学校でマルチリンガル教育に本腰を入れる必要があることと、英語を学習させることで日本語教育にも目を向ける必要があることを強く語られた。また、日本在住の外国人に対しても日本語だけを使って教えないで他の言語を取り入れてマルチリンガルな日本語教育へと転換すべきだと指摘された。大半の日本人が現地に行きさえすれば現地語がしゃべれるようになると思いがちだが、母語と現地語の両方で「話す」・「聞く」・「読む」・「書く」ことができ、さらに社会性を持ち合わせる子供を育てることは、そう簡単にはいかない。親がバイリンガル教育の難しさを理解し、できるだけたくさん子供に話しかける努力をし、母語が継承語にならない教育をする必要性がある。モノリンガルの視点からでなく、マルチリンガルな視点がかこれからの教育に必要であるという話がとても印象深かった。

(船越貴美)

懐かしく、ホッとするひととき

幹事長 田尻利恵子

多少自己中心的に？研究大会後の懇親会の様子をお伝えします。乾杯直後の中島巖先生との関大の歴史やこれからの教育の在り方についてのお話は、まるで基調講演を聞いているかのようなようでした。その後、毎回積極的にご参加頂いている現役院生のYさんと修士論文についてお話をさせて頂く中で、在学していた時に同じようなことで悩んでいた話題になり、ついつい熱く語ってしまいました。大阪大学院の院生のUさんに研究発表の内容について質問をした後は、現役院生のNさんと同じ研究領域である小学校英語からファッションまでお喋りに花を咲かせているうちに、楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。ふと、在学中に研究室等で話していた時のような感覚が蘇り、懐かしく、ホッとするひとときでした。研究大会、研究会の後はいつも、「また明日から頑張ろう！」という気持ちになるのが不思議です。きっと、会員の皆様のご活躍の様子を発表や懇親会での楽しい語らいがそんな気持ちにさせてくれるのだと思います。ご参加頂きました皆様、本当にありがとうございました。

最後に、これからの学会活動の予定ですが、6月12日(土)に研究会と定期総会を予定しております。この研究会は、毎年恒例となっており博士論文、修士論文執筆に役立つ情報提供を目的とした内容で開催する予定です。詳細につきましては、学会ML、あるいはHPにて随時お知らせ致しますので、お時間のある方は是非とも足をお運びくださいませ。お1人でも多くの皆様が、研究大会、研究会に参加することで、「また明日から頑張ろう！」と頑張って頂けるような充実した内容をご提供できればと思っておりますので、変わらぬご協力、そしてご理解の程どうぞ宜しくお願い申し上げます。



【編集後期】

気温の上下が激しく春らしい春がないまま、夏を迎えそうですね。新学期の慌ただしい中、NEWSLETTER 発行にご寄稿、ご協力をいただきました皆様に感謝いたします。